桜坂、裏道にて

U．N．O．

走っている間、周りの目が気になって仕方なかったけれど、涙が零れ落ちて止まらなかった。泣きたい訳じゃないのに。体中が張り裂けそうで、滾(たぎ)るように熱い。平日の、まだ日も高い時間のせいか乗り込んだバスの中は幸い客が少なかった。人を避けて、誰も座っていない席を選び抜き、私は本格的に涙を堪える事に集中し出した。

携帯電話が鞄の中、バイブで揺れている。つい条件反射でミントグリーンのそれを手に取ると、サブディスプレイには「篠塚大祐」と、先程までは確かに笑いあっていた名が表示されていた。メールを開かずに仕舞っちゃうなんて初めてかも、とひっそり笑った。

――裏切られた！　約束していたのに！

――違う。裏切られた訳じゃない。受け入れなくちゃいけないの。

冷静に自分を諭す言葉が激情にかき消されそうだった。

バスと一緒に、周りの男子高校生の青いブレザーもふわふわと揺らぐ。今だけはその上等な布を目にいれたくなくて、私はフッと瞳を閉じた。

あいつに出会ったのは、中学の入学式だった。放課後、名字の順番で早々から日直当番になった私は、日誌の最後に「荒川優袴(ゆうこ)」と名前を書き終えた後、音楽室へ向かっていた。外からは運動部の新入生を誘う声が賑やかに聞こえてくる。廊下で掛けられる勧誘を断って、私は急いで走っていた。体には、先程の式で演奏された、弾けるような音楽が零れてくるように聴こえていた。これから新しく始まる中学三年間を、私は吹奏楽部で過ごすことを決めていたのだ。白い扉が見えてくる。

「失礼しますっ」

ドアを滑らせて目に飛び込んできたのは、金銀に輝く楽器ではなく、一人の少年だった。黒い遮光カーテンは開けられていて、午後の陽光が燦々と音楽室と少年に降り注いでいた。私は驚きの余りに、一瞬言葉を失っていた。

「新入生？」

少年は名札に引っ掛かっていた私の造花を見て、口を開いた。彼の胸にも同じ桜色が咲き誇っていた。

「うん……あの、吹奏楽の人達は、」

「ああ、講堂でやっているよ。俺は今トランペット担当の先輩がいなかったから、こっち見せて貰っていたんだけどね」

見せて貰った、と言う割に他に人影はなかった。恐らくこの音楽室はいつも鍵を掛けていないのだろう、誰かが彼と一緒に来て音楽室を開けたならば、彼はこの陽だまりの中に一人でいない筈だ。私は早速同期の仲間に出会えたことが嬉しくて、勢

いつけて話し掛けた。
「私も！　私もトランペットやるの」
「マジで！」
　今まで柔らかに微笑んでいた表情が破顔一笑した。それが、私の中学生活のスタートだった。

　カタンカタンとバスは揺れる。いつものような帰り道。勿論いつもはもっと夜近くで、昼間に帰宅へのバスに乗るなんて今日のようなテスト明けの日しかないのだけど。私はそれから、部活で一杯の毎日を送った。音楽は毎日触れる事が大切だから、休日なんて殆どないような日々だったけど、充実していた。

　あいつが親しい楽器仲間から親友になった切っ掛けは、入学から一年半後の、先輩の引退祝賀会だった。
「ウチらも受験勉強始めなきゃならないからね」
　先輩達も、これから越える春を意識し始めていた。私が菓子を摘んで、ジュースを注ぎ足している時、あいつもすっかり仲良くなった先輩と進路の話をしていた。
「やっぱさ、勉強は一年の内からやっておくべきだな」
　先輩の説教を熱心に頭に入れて、彼は傍らの飲み物を一口含んだ。先輩は自らの志望校について語った後、お前はもう決めてんの？と彼に問う。
「オレは波高ですね。トランペット続けたいですし、波は吹奏楽の強豪ですから」
　音楽推薦で入れたらいいんですけど、と頭を掻くあいつを見て、先輩は私へと振り返った。
「じゃ荒川と同じじゃね？　確か同じ波高だったよな」
「は、はい」
　話は聞こえていたけれども、振られた話に慌てて応えた。
「篠塚も波高だったんだね」
「おう、高校でも吹奏楽入ろうぜ」
「当然。何の為に波高目指すのよ」
　春の試練を控えた先輩達の前で会話が飛び交った。

　あの時から私達は、波高について二人で調べたり、放課後に残って勉強したりして、よく話すようになった。
「一緒に波高目指そう」
　確かにあの時は、そう約束したのに。何となくは気が付いていた、あいつが最近目で追いかけていた制服が私の視線の先にある。青いブレザーを着た男子高校生の哄笑が響いた。その制服を着た少女は、一人としていなかった。
　一緒に頑張ろう、って言ったじゃない。今度の春には二人で波高の制服着よう、って約束したじゃない。

　高校見学に行った夏までは、彼の目には間違いなく波高が映っていた筈だ。
「さすが最上階からだと、眺めも最高だな」
　憧れの校舎の壁に身を預けていた私に寄って、あいつは滑ら

かにスライドする窓を開け放った。青々とした夏草の匂いが鼻腔に流れてきた。
「今はまだまだ勉強しなきゃならないけど、ここで三年間過ごしたいね」
そよいだ風が顔に浮かんだ汗を消してくれる気がした。
「でも、オレ達が入っても入らなくても、この学校は何も変わらないであるんだろうな」
不意に流動していた風が止んだ。あいつはふっと口を閉じ、そして空に目を遣ったまま言葉を紡いだ。
「そうだろうけど……一体どうしたの？」
いや、何でもないんだけど、と言い繕おうとして、諦めたのか彼はそのまま息を吐いた。
「何で人生ってさ、思った通りにいかないんだろうなって」
彼は私を見ないままに呟く。
「そんな事とっくに知っていた筈なのに、いざ突き付けられるとどうして良いか判らなくなる。オレが選んだ結果で傷つく人がいると考えると、苦しくて仕方ないんだ」
いつも明るく振る舞う彼が、心の迷いを吐露した。その時は、何に苛まれているのかはまだ聞けないのだろうと、少し寂しさを感じたけれど、いつか心が決まった時に話してくれると信じ、私は彼の背を叩いた。
「でも私達に起こった事ひとつひとつが、私達の中に積み重なっていくんじゃない？　何が正しかったかなんて、一概に言い切れない事だってあるわよ」
あいつは見上げていた空から隣に佇む私へ視線を下ろした。
「人を傷つけてしまうのはすごく怖いけれど、一緒に癒やしていければいいんじゃないかなぁと思うよ？」
あいつがさっきまで眺めていた方に目を向けると、他の季節には見られない遥か彼方にあるような青が視界いっぱいに満ちていた。横から小さな声でありがとう、と呟かれた。ちゃんと区切りつけるから、きっと、秋に、と辿々しい声が繋がれた。
涙はもう溢れなかった。軽くハンカチで目元を抑えると、少し充血してしまったかもしれないけれど、いつもと変わらない私になっているだろう。
あいつも、誰も皆が色んな自分の未来を描いて生きているんだよね。何を目指すか、何を目指したかによっても、人の一生は全然違うだろう。私とあいつは初め同じものを夢見たけれど、違う道を歩んでいくことになる。でもいつかまた、その道が出逢うことがあるかもしれない。
着信を知らせて光を灯す携帯電話を取り出して、メールを開けた。
――優袴ごめん。でも俺あの高校でいこうって、覚悟決めた。だけど進路違っても一緒に最後までやりたい。みんなで志望校めざしたいんだ。行く学校が違っても、俺たちずっと楽器やって、頑張って行こう。本当に突然ごめん。

ブザーが鳴って、バスがゆっくりと速度を落としていった。家に着いたら、大祐へ認(したた)めるメールの内容を頭にまとめながら、私は立ち上がる。私はゆっくりと、バスステップを下っていった。